

『日本語学を斬る』国広哲弥著，2015年，研究社，東京。

プロスポーツ界ではマスターズって銘打った試合がしばしば開催されますよね。往年の名選手が一堂に会して試合をする，あれです。かつての名選手の雄姿を再び見ることができてファンにとってはたまらない機会なんです，あれってどうなのでしょう？綺麗な思い出は綺麗なまま，心の奥底にそっとしまっておいたほうが，結局はファンのためかもしれません。同窓会で初恋の人に会ってがっかりするのも同じことです。

どこかで一度書いたかもしれませんが，老後に充実した研究生生活を送ること，これが僕が研究の道に入ったときからずっと持ち続けている大切な夢です。静かな書斎で書を読みながら人生を終える。素敵な人生ですよね。本書はことばの意味の研究に人生をささげてきた著者が退職後に纏め上げた研究です。86歳になっても衰えを知らない研究意欲だけでも敬服に値しますよね。著者は，日本の意味論を長年リードしてきた大学者ですし，退職後も研究を続けているという意味で僕にとっては目標としている存在でもあります。尊敬の念に堪えません。その気持ちに偽りは無いのです。が，ただ，それでもなお，「ちょっと残念だな」という感想は否めないのです。

本書の帯には，「日本語学の『定説』を徹底的に批判して，目の覚めるような新説を提示する」とあります。批判は大いに結構なのですが，せめて先行研究に対してはリスペクトを払わなければ。藁人形を叩くような議論は，大学者であっても慎むべきですよね。例えば，「山梨的視線認知論は人間がものの位置や形を比喩的に描写する能力を持っていることを否定するものです。(p.136)」という物言いは，山梨先生のライフワークを否定するような誤解で，むしろ滑稽です。もう少し丁寧に謙虚に他者の主張に耳を傾ける必要があったのではないのでしょうか。ただ，まあ，そこは，笑って読み飛ばしてしまえばいいのかもしれない。なにしろマスターズ上でたエラーですから。

ただ，一事が万事こんな調子なので，本書を読み終えて考え込んでしまいました。どうやら，研究者にも旬というものがあるって，その旬を過ぎたら引き際を考えることも大切なのかもしれません。誤解を招かないように付け加えておきますが，僕は著者のこれまでの研究をすべて批判しているわけではありませんよ。要は，プロ野球選手と同じように，研究者にも旬と引き際があるということ（筆者の意に反して）僕は感じ取ってしまったのです。往年のスター選手のキレの悪いボールさばきは，少年の夢を育むよりもむしろ，幻滅させてしまうかもしれないのです。

いずれにせよ，僕はどういう老後を過ごしたらいいのでしょうかね。老後も研究を続けるぞという確固たる信念が揺らいできました。若い連中に失笑されながらも研究を続けるか？（文責：町田章 2015年6月3日）